

地中海

一一〇一三一年 三月号 (通巻七六六号)

◇今月の二十首詠……東京の夏

杉浦詩子 2

■作品[A]

中島央子・中島義雄他
中川富美子他
中林昭三他

51

A C B A

永井秀次郎他
色井靜代他

52

■オリーブ集

角田玲子・金光昭子

53

◇今月の二人

山之内香代美・樋口淳一郎

54

香川進の生きものの歌 41

田土成彦 15

55

私と短歌との出会い (235)

田村利子 19

56

■菊地栄子歌集『賢道』批評

沢口美美 34

57

頑固さと繊細さ
「老い」ということ

牧 雄彦 38

58

■西堤啓子歌集『あるがまま／スマイル』批評

なみの亞子 38

59

抱え込まれたもの

わたしはパンダ 38

60

わたしはパンダ

高尾恭子 38

61

◇春のアンソロジー 「心は今も」 中村博子 48

■遊覧香港 〈鄙の里 安中〉 大久保麗子 50

◇シルクロード・カフェ 【責任編集】木村文子 52

■歌壇月旦 短歌甲子園 藤田美智子

53

■一月号作品批評 A

檜垣美保子・河野繁子 70

54

B 松浦禎子・箕浦 勲
C 国原喜美子 坂上直美

55

オリーブ集 坂上直美

56

最近の歌誌より 久我田鶴子 18

57

〔編集部〕

58

第16期オリーブ集メンバー表…… 93

59

クリップ…… 94

神田通信…… 表3

60

東京の夏

杉浦 詩子

一九四六年生まれ。
二〇一二年、地中海入社。
宙の会所属。
歌集に『白鳥伝説』がある。

娘の家に規則正しく邪魔せずにわれら夫婦の老いの準備を
 手をひいたつもりが孫に手をひかれ通園の道蝉も晴れやか
 二人つきり秘密だよねとかき氷分け合う孫の汗に陽が射す
 毎日の送迎嬉しわれと孫一人の影が笑つてゆれて

おばあちゃんついて来るよと孫の声東京の夏の影は長くて
 ぬける青蝉の合唱さるすべり東京の夏孫と歩けば

母のことどれだけ解つていただろう百日紅ほろりこぼれて悔いる
 必死さを訴えること蝉が鳴くツクツクボウシもう夏はゆく

虫の音は母に似ている真夜更けて眠れよねむれ詩子眠れと
彼岸花わが名呼ぶ声聞こえくる母が呼ぶのかただ風の音か
時だけは取りもどすことができぬから夜ごと現わるる人にとまどう
幾度となく夢に現わるその人は若き日のままわれのみ老いて
この思い納めたつもりがむくむくと青春の日の帰らぬあれこれ
夢の中全ては完結していったのにまた一からの朝がはじまる
ファドを聴くポルトガルの夜そうあればコロナまだ無くおだやかな頃
白い萩こぼれ落ちてる散歩道逢魔が時が背中にせまる
たれこめた暗い雲間に一筋の茜が見えたら私は生きられる
おいでよと枯尾花呼ぶ丘陵に怪しく風吹き立ちつくす夕
ソファーの上置き忘れているシリコンの胸の詰め物のガンサバイバー
鏡の前己が姿を正視するそこに非対称の胸を晒して

作品 A

中島 央子 笠雲

森

永塚節子 虹

銀

沖

冬さむき朝の陽かへす父母の墓白雲切れゆく富士が見おろす
あれは若しおとうとの呼ぶ魂かとも朝日を受けて笠雲ながる
義妹の心づくしは亡き母を偲ばす莓富士の章姫
いもうとの姉様二人と妹御はかなくなりしを声なく聴きつ
人住まぬ古里の家を一回り甘夏・レモンのめぐみを見上ぐ
宝永山・大沢くづれに雪光るいどみし頃の脚力が欲し
山部赤人も眺めしならむ松並木田子の浦曲の釜揚げ白子

中島義雄

青林檎

岡

仲西正子 ヤシの木

木

沖

年賀状の予約に来たる郵便夫癌病む父を語りゆきたり
青林檎一つ置かれてかがよへど吾の病ひは風の如かり
吾のために剥きくるる林檎ゆらゆらと遠来の友の膝に届きぬ
嫁が醸せる手造りの甘酒の一杯が消しがたき腰病の一ときを消す
酒飲めば少しは安らぐ痛みかも外は冷雨の音となりたり
衣食住足らざる何のあるでなしただ一椀の粥を淋しむ
眠剤のシートを空けて一剤を呑み乾すときに許容はひらく

窓の辺に冬の虹と友の言つ過ぎる不安を消す術のなし
あるがままなべて肯い聞いて聞いぬいて逝きし友はも
残されし辞世の一匂おりおりに我を励ます声に変われり
折ふしにあなたにメールしたくともアドレスあれどあなたはいない
ホルダーを開けばそこに友のメール写真もありて声の聞こえ来
年賀状印刷の前事務的に一人の友の宛名消去す
今頃は背の君の待つ彼岸へと虹の架け橋渡りか行かむ

一粒の力を見上ぐ真っ直ぐにマニラヤシ立つ実もたわわなり
コウモリは如何に選り分け突きしか朱き実ばかり転がりて いる
出稼ぎに行きし人等も見上げしか朱く熟れたるマニラヤシの実
コウモリの突き落とせるヤシの実を双手に集め汽水へ流す
汽水へと流すヤシの実ひき潮に誘われてゆけ南の島へ
寄り合ひてグランドゴルフに来てあれど一人遊びすヤシの木の下
この手足伸ばして菜園耕せどうジオ体操で跳ぶのは怖い

白子れい 疏水

・洛

あさ朝を歩行補助機に助けられ疏水までゆく子鷺の待てば
ほそき細き脚にてしかと身を支え水中の餌をさがしいる驚
大き波たてつつ疏水を上りくる舟の客らか吾に手を振る
ボーッと佇つ吾に手を振る舟の客われも応えて互いに手を振る
見も知らぬ舟の客らを見送りて気付けば驚の姿のあらず
銀杏葉を楓紅葉を浮かべくる疏水の流れにこころ奪わる
補助機にて午前に一度午後一度出かけ身めぐり紅葉ふかまる

ぱぱりようこ

自答

・鹿

未来とうは老若問わず擦としてかがやき充てるとわが自問自答
こと全て不器用なること今日もまた小指さつくりかぼちゃ切るとき
この五体 母より継ぎしものなれどひき継ぎゆきぬひとつだになし
たまわりし命の危機をいくたびか乗り越えてまた真向かう試練
ねいぐるみの猫をつれて入院す あわれ うしろ髪を曳かれたおもいに
浅き夢つなぎて 朝迎えたる空に残月こころもたなげ
選ばれて生を享けたると今更にしみじみとして母の恩恵

浜谷久子

葉ボタン市

・地

ダチヨウの居る土地通り過ぎ府立大農業試験場葉ボタン市へ

いく種もの葉ボタンきしり畝の列組み合わせ自由スコップを持つ
日に光る紫葉ボタン暖かい色を多めに白と合わせる

二鉢のボリュームたっぷり葉ボタンで埋まるわが家の小さな玄閑
寒風に葉を揺らせて葉ボタンのふた色い増し迎える新年

ふたりして今年も顔出す葉ボタン市この先ひと日の見えがたくして
いよいよの節目か車の運転を考える歳時間のぎくしゃく

浜本芙美美

・国蝶

・夢

むかし、あなたのくれたる万華鏡今もわたしの心をてらす
いつか独りになると思ひる夫か何も言わずに炊事場につ
眼と鼻の距離にありつつ訪えぬ近くで遠きコロナの夏の
ここに立ち幼な日ひきよせなつかしき言の葉のみが独り歩きす
枯れいろの観音竹の根方には「希望」の二字をたたず新葉
国蝶のオオムラサキの幼虫を楓の枝に見し日は はるか
さ庭辺に「ツユクサ」の色みえながら心は夏にとどまりていつ

檜垣美保子

振り子

・昴

「トリッキー」に似て非なる五音くりかえしふつ笑う六歳男子
東へと帰りゆく孫ふたりいて車酔い封じのまじないを手に
泊り客去りたるのちの日照り雨やみそうでやまぬ小半時なり
満ち潮の河口の水面のふくれつ面 くろき一羽のふいに降りくる
うごかない時計の振り子にやすらげる極月半ば真夜中ひとり
揺れやすき日もありしかどつこもりの振り子時計の振り子振りざり
ははにみえわが目にみえぬものありて起き抜けの朝の屋根の人影

福田庸子

この国

・今

人間の脳は樂する方へ向く進化の奥に笑ふコロナが
オミクロンウイルスのニュースをこじ開けて朝の二ヶ所の地震告ぐるは
晒されて和紙となりゆく三極の遠き導きをたどる空あり
新空に笛をまろく抱きしむ三極の枝寒の朝を

縦書きに記すは絶滅危惧種ぞと囁きながら文したためる
仮名文字の縦に流るるなめらか筆のしるしを誇るべきなり
流水と珊瑚礁まで海にもつこの国の位置幸を恵むも

も

藤田美智子　呼び合ふ力

・新

牧雄彦

相生湾・秋

・大

夏に湿り冬に凍みたる土のなか七歳のまま骨はありたり
骨の声を聞く人ならむ沖縄より来たりて少女の遺骨を見つくる

父と娘の呼び合ふ力と言ひきりぬ少女の遺骨を見つけし人は
骨の若さが汐廻ちゃんとの決め手とぞ津波当時は七歳なりし
（おかへり）と娘の骨をなでてゐる木村紀夫の手の指の皺
十年間掘り出さるるを待ちゐたる少女の骨の色を思へり
沖縄と大熊を結びたる願ひなり（遺骨は家族の元に帰るべし）

藤森巳行　無始無終

・銀

松浦楨子　依代

・依代

・羊

元旦も大晦日も変はりなし今日の続きのただの一日

寅年といへば寅さん偲ばれるケッコウケダラケ今年も生きよう
雪に逢はず人にも逢はず三箇日「雪達瀬」とふ酒をいただく
無始無終宇宙の歴史に比べれば地球のコロナ禍ほんの一瞬
人類の歴史は僅か七百万年未来があるさと星は瞬く
我が生命無始無終なり繰り返し生死生死の旅を続ける
頑固さがあなたの歌を駄目にする妻の批評當たつてゐるかも

船田清子　加湿器のつぶやき

・天

松瀬トヨ子　花酔いの蜂

花酔いの蜂

・沖

咲かぬやと思ひし終さすがに師走白き豆つぶふつふつと噴く

加湿器のピチュピチュと小さくつぶやくをコロナ鎮めむ呪文かと聞く
電飾のかざりめきつつ赤・青・黄・緑・紫めぐる加湿器

陽は照るも湿度ある風にあふられて洗濯物はなほ湿り持つ
太陽は風神に勝つとは限らぬを知る今世紀の自然現象

冬至過ぎ夜が一步づつ後ずさる　日の入り際の明るさ恋ほし
わが視野にただ一つのみ光る星我を見守る君のまなこや

赤人がゆきけむ瀬戸の海原に秋の日差して縞模様なす
きらきらと輝く秋の瀬戸の海ここに立ちしか万葉人は
沖へゆく小さき船見ゆモーターの音がかすかに崖をのぼり來
この海も荒るる日あらむいにしへの船旅もまた苦しかりけむ
秋の日を浴びつつ巡る万葉のいしぶみ廻む椿のみどり
「初雁」と名づけられたる椿の木秋の日に葉がちかちか光る
この日ごろ逝きし人ありその魂の遊びゐるかと海に向き立つ

来宮の社に仰ぐ大楠の樹齢二千年木靈ひき寄す
「来宮は樹齢二千年の大樟」と奉ぜし一首佐佐木信綱
鏡の前白髪の神に守られていまある命と伝説に云う
古き世の神の依代その幹に石の様なる瘤を生して
常緑の樹は年ごとにその若葉葱しみたる証をのこす
神宿る大楠の根元を幾めぐり命のゆくえ祈る歲の瀬
大楠の前に祈りをささげたる人びと行き交う面輪恵みて

介護車の窓に見る県立図書館に行けなくなりて四年も経ちぬ

松永智子 旅

・嵐

三好聖三

無意味

・伊

うちがはの夏のこころのよりどころよみがへりくる亡き人の声
さめてきくしづかなる音はるかなりあかとき聞を踏む足の音
ことばなく行く人の影踏むことなく追ひゆくもまた影にして
音はてし午前二時の闇にさめ聞く闇の音とほき日の音
音絶ゆるビルの闇の底に覚め聞くとなく聞く音のなき音
細りゆくおのがいのちのあらがひのかたちにあらむ湿疹を搔く
外歩きままならぬ身にとほりくるわが旅の声若き日の声

三浦好博

冬の満月

・鈴

御代田澄江

残月抄

・茨

シナップスの誤作動つづき口なかの同じ所を噛むもういやだ
よもすがら風は淋しき音に泣く蒲団に寒くそを聞きにけり
ある日ふと取り残されて生き残る淋しきこと
未経験の肺抜けの寂しさ恐ろしさ知らずに先に逝きたし逝きたし
草生から枯生に移るこの早さ我の老いゆく時間を見て
落日のかけの血の色沈みつつ雨戸閉めて湧く淋しさは
楽な道なほ選ばむとする我を暴き出すやうな冬の満月

宮本靖彦

逝く年

・凌

紫の菊花供へぬ「もつてのほか」食用の菊山形県産
次次と想ひの流れ歌ひとつ脳の奥にひそみ出で来ず
しなやかに身を低めつ車の前黒猫過る右より左へ
圧倒的な華やぎ見する紅葉渓日本の秋今盛りなり
山猿の姿も映し温泉郷紅葉の中へ猿は往ぬめり
残月は下弦となれり朝ぼらけ冬の始まり未だ霜を見ず
緩やかな坂を登ればかさこそと舞ふ枯葉あり紅き桜葉

茂木斌

アブダビGP

・埼

温暖化うべなふされどこの寒さ庭の水仙やさしく聞く
お歳暮の待ち四十分客足のもどりし百货店何かうれしく
年賀状減らせど印刷音はづみ時改むるの近きを覚ゆ
網からむ冒險道をのぼり来て公園頂上冬の我が街
空腹を告ぐる公園鶴群吾も叫びたし頭の空白
暁方の目覚めにたどる地中海誌歌友の歌に生きさまを読む
どの家も車ひつそり泊りゐてコロナ禍二度目の大晦日迎ふ

メルセデスかホンダが勝つか決着はこの一戦にチャンプを競ふ
ボイントは互角最終レースにて勝利の女神ホンダに笑めよ
ドライバーズチャンプの決まるバトルなりスピードにかける戦ひ熾烈
レッドブル・ホンダの勝利念じつつ夜中に覚めてケイタイ開く
結果には最終周のターン5に奇跡のパスしメルセデス断つ
翔平のMVPほどのうれしさよF1ホンダのアブダビ優勝
リヤウイングのHONDAの文字がもつともに輝きて見ゆわがホンダ馬鹿

畑中の猫の骸の暮古月跳ねるもあれば寝返るもあり
与え助が昼飯代わりに食べているへらへら餅の粒餡ばかり

私にはかかわりのないことですとおもいたくなるのかすかず
赤色のコルゲンコーワのパッケージを開けてしばらく厄介になる
前科者ジユネが籠れる娼館の屋根に真青の雪積もりたり
呼えまさる師走の二十日賜りし京のお菓子の『幻月』を食う

もとむらしげと

母逝きて

・そ

高校へ行かず嫁ぎきてうら若き農婦となりて我を産みけり
母逝きし家に積もれる母の匂い「家の光」も「婦人俱楽部」も
黄ばみたる「家の光」の出で来たり若き農婦の母のなぐさみ
嫁ぎくる条件として本を読むことを許されしと母は言ひけり
隠すみに母の気配のこる家母あての郵便きょうも届きぬ
除草剤ひとりで蒔きぬこまやかに指示せし母が今年はおらず
父母の居ぬ生家となりて六月過ぐ絶やざさらむよ門前の花

八乙女由朗

脛

・柴

戦前の体形われに残りいて脛短きは靴下余る
配給米漸く運びし記憶あり男の子はなべて労力にして
西山から七北田、岩切を行軍し学校へ戻りたる膝脛の足
戦後生まれは脛長くして姿良しわれらに用なき弱きスタイル
諸話を支えきたれる九十年愛しもよわれの脛の形よ
正月は神社仏閣の大写しわが家のテレビ専ら親しし
挑戦の夢あらずして三ヶ日朝はお餅夕はご飯

山下雅子

爽快感

・習

コロナを蹴り走る若き力ならむ箱根に漲るこの爽快感

コロナ禍も異常気象も知らざりし若き笑顔の夫におめでとう
すたと歩み道を杖たよりマスクかけゆく五十年経て

ふと黙しし母の心根諾えり九十歳の今ならわかる

いつの間の九十年と思うなり動くともなく雲は流るる

即断も即実行もはや無理た易さを追う日々のむなしさ
転ばない転べないをモットーに生きる日々なりもたもた動く

養学登志子

元氣

・凌

外出すしばらくはしゃんと歩かねばどこか誰彼見ている元氣
お元氣そよくお出掛けでなど言われ痛いの痒いの言うてはおれぬ
手術後の痛みを庇いし年月はいつしか丸き脊のかけなせり
セーターは丸まりし脊をまことに見す氣づきて伸すもほんのひととき
骨接の足を毎日マッサージ介護なす娘のこと言う見舞え
新聞のルビまで見ゆる眼となりしも北斗七星五つのままなる

七つ星あるべきところみつめれば見ゆる氣のする柄杓のかたち
冬鳥は澄む空渡り川を越え海と湖との境を繼ぐ
冬鳥のたむろする川潮の満つ野原莊は今も変わらず
雪の降る川面ゆっくり水鳥は漁りながら光をまたぐ
霧流る道に消え行く乗用車出勤急ぐ街のざわめき
暮れ残る田んぼの糞にすがりつく地球の命土塊一つ
今日もまた田んぼの道はにぎやかに老人達の笑顔が歩く

山本孟

近事泡沫

・大

冬の空渡り行く鳥何か捨て何かを拾い川に沿いたり

冬鳥は澄む空渡り川を越え海と湖との境を繼ぐ

冬鳥のたむろする川潮の満つ野原莊は今も変わらず

雪の降る川面ゆっくり水鳥は漁りながら光をまたぐ

霧流る道に消え行く乗用車出勤急ぐ街のざわめき

暮れ残る田んぼの糞にすがりつく地球の命土塊一つ

今日もまた田んぼの道はにぎやかに老人達の笑顔が歩く

山野幸司 冬

冬

・沖

横田敏子 梦

・福

市原やよひ 雪

・萬

たそがれてゆく夕空を追いかけて車走らす まだ夢はある
胸裡に小さき小さき海を抱く涙を沈め夢を浮かべる
猫の手を借りたい歳の瀬猫居らずたつ二本のこの手が頼り
オミクロン株の合間をさつと来てさつと帰りぬ帰省の子等は
真っ白なモンスターふたつ庭に立つ正月四日の大雪の朝
万歩計今日はたつたの五七七字余り俳句よ歌には足りず
独り居のひと日の夕べ玄関を開けてやさしき風を入れたり

吉永惟昭 姉も兄貴も

・熊

忽然と姉も兄貴も帰るなき旅に立ちたり令和三年

青春が戦の最中躊躇あれど姉は嫁ぎぬ職業軍人
音痴ではなきと思えど幼なより聞きしことなし姉の唄声

百二歳独り居の姉厨にてポクリ過ぎぬ 秋蝉のごと
おうとりに傲慢少し甚六のふりせし兄は公務員向き

医師にして子宝のなき兄貴なれど本に残しし「ユーモア人生」
川柳が好きだった兄「死んだふり」そのまま逝きしと甥の述懐

磯田ひさ子 冬晴れ

・森

「冬晴れ」の言葉好みし雨宮雅子逝きて三年歌残りたり
街を分け枯れ野を裂きて走りゆく電車ま哀し切々として
復活はまぎれもあらず鋤返しされたる畠の黒く光りぬ
踏切に電車の通過待つ人の無垢の心がゆふべ輝く
進学塾 国會議員のボスターが過疎の駅前にすずいと並ぶ
沿線にソーラーパネルが波を打つ令和三年の日本の暮れ
結願の人らの板書に「天国へ行けますように」「許して下さい」

コロナ少し落ち着き来たる証かも初詣に並ぶ列は長しも
初詣の神社に長き列続手水舎に柄杓今年もあらず
行儀よく静かに並ぶ境内に鈴は一際澄みて響けり
それぞれの願い託せる絵馬掛かる一隅にのみ光当たれり
二年間会わざりし孫の高校生坊主頭の野球部キャブテン
てきばきと一人の食卓を整えて行く孫頼もしき
外灯の霧に包まれ滲みたり雪のこの街さらに白くす

梅本武義 ありんこ

・羊

ひんやりと百舌の鳴く朝待つ方が良しと出かける少しときめく
何かよき短歌の浮かび書いたはずメモ紙はどこに半日さがす
菜園に独り言ちは周囲見る誰も居らぬの確信あれど
菜園に使う農機具高けれど趣味の費用と収支思わず
小鳥らに見向きをされず夕光に柚の実たわわ里のおちこち
顔ぶれは昨年に変わらず一年の老いを言い合う清掃奉仕
年の瀬の掃除の書架に見付けたり妻の卒業文集「ありんこ」

大浪美雪 菊の香

・森

庭畠の小菊のこぼす黄の花粉生きるといふは地を汚すこと
抱へたる枯れ菊にまだ残りたる菊の香りを胸深く聞く
霧深き季となりたり庭畠の白菊はつか紅のさしそむ
ヒヨドリの音立て騒ぐ蔽陰の南天の実は残り少なし
噴水の秀先に乗りてヒヨドリは翼を展げ光散らせり
噴水の秀先をめざし木の上のヒヨドリは順に水を潛りぬ
朝早く時雨ぬきしか石窓に水滴残りぬ今日は立冬

奥田陽子 歩む

・羊

木の間より洩れくる光に射られおり喪中葉書のひとりをおもう
今年多き喪中の報せ思うにも歩みは止めず木の葉降る路
脚わきひとりと歩む朝の路川よりの風はや冷えをもつ
たどたどしく歩む幼らそこ此処にあなうらに踏む広場の芝生
片隅より歎声湧けり幼な子のたどり着きたり母のその胸
青空に梅壇の実の揺れているそんな午後なりただ歩みゆく
秋となりちいさき蝶の群る野に死者も来たれり若き笑顔に

小野雅子

笑み

・羊

年賀状書かむとすれば浮かびくるあの人声あの人笑み
ほほゑみて汁椀ひとつ求めゆく若き男性 暮のスーパー
支払ひの機械に慣れていそいそと週刊誌買ふセブンインレブン
「得」に「お」をつければ相手の得になるコマーシャルが教へてくれた
ハーンとはチングス・ハーンにあらずしてラフカディオ・ハーン 早朝のラジオ
はかなさを瞳の奥にのぞかせし若き歌手逝く雪降る街に
「ケータイ」のなき頃の唄かなしみを若さを秘めて美しきかな

神田鈴子

万葉岬

・大

久びさの遠出楽しむ相生に牡蠣づくしなるランチをえらぶ
瀬戸うみを見下ろす岬のをちこちに文学碑あり雨情の詩碑も
万葉の岬に山部赤人の望郷の歌しみじみとして
まな下に広ぐる秋の海屈きて牡蠣養殖の筏が並ぶ
ひる下がりの海にきらめく日の光養殖いかだにさんさんと降る
夕べにはまだ間のありて夕日百選の岬に心を残しつつ去る
とつぶりと暮れて家路を辿りゆく夜空に月は欠けつつありぬ

菊地栄子 大島

・島

秋の日の思いひとすじに出で来たる三陸道は紅葉だけなわ
手摺りなき社の石段足すくむ手をつきにつ登らんとして
直文の恋のいしぶみは海の色津波も避けしかその重量は
定期船に渡りし思い出いま老いてま白きアーチの橋梁を行く
砂浜にわが足跡と胴長のわが影映るいすこへゆかん
いたわりて声掛けくるるホテルマン朗らに言葉返さんとする
遊歩道あゆみ来たれる大島の朝のひかりが時にきらめく

北山雪男

綴る指先

・伊

ネットにて検索すればあな悔し俺に無断の〈俺〉流れ来る
鍵かけて睡らせてるマイナンバー脛の古傷起こさぬやうに
G P S・スマホ・ペイペイ 電磁波の沙漠さまよふ羊か我ら
泣き疲れ眼の辺 堤未果『デジタル・ファシズム』暗澹と読む
ラッダイト運動想へば冷え冷えと凝る指先デジタル社会
日記閉づ行方知らざる奇立ちの今日といふ日に付箋貼付け
見て聞いて奥で確かめ味見して俺はB型縄文の商

草刈十郎

木守柿

・世

煌めきて落暉に染まる木守柿孤高を持して秋惜しみをり
男でも女でもなく着ぶくれて今日も炬燵を守りゐるなり
振り返ることばかりなる十二月この一年のわれの道のり
海渡り今年も來たる冬将軍拉致被害者はいまだ帰らず
独りには広過ぎる卓のひとところ湯豆腐おきてひとり酌むなり
散り敷ける銀杏落葉にほんのりと日のぬくもりを感じる午後
熱爛を酌めばあれこれ思ひ出づ記憶の箱の開きゆくなり

國井節子 お礼

・春

千年の神のみ社椎の森風吹くたびに、転がるさわぐ
 くぬぎなら 榆椎 枝舞ひ踊る風の通ひ路神も舞ふなり
 山野草摘みつつ登りし頃もあり生駒の山のくらがり時
 この羽で遠き北から飛んで来てこの池に降り平和に暮す
 除夜の鐘聞きつつおせち作りたる創作意欲はどこへ消えしか
 朝焼けの南の空に浮かびをり闊空に降りる一機光りて
 来春もすこやかに咲け芍薬の根株にたつぶりお礼肥やる

河野繁子

窓

雁

元日の月読みほそく櫛の木の上に輝く 目覚め待つ窓

「乱れたるゴルフのコース直して」と訴えにくる 布団を直す
 初雪の朝を迎えるディサービスへデビューは途中で電話のかかる
 選びたるピンクの膝かけ持ち帰り思わぬ我へのプレゼントらし
 冬桜雪を被りて散りもせず齧歎多かりしえにしのありぬ
 くきやかにオリオン凍てる星空にこころ澄み来て愛しみの涌く
 樽の丘裸木燃やし陽の昇る正月の窓ひとりおろがむ

近藤栄昭

ふかふか

虹

コロナ禍に吐いき温きを思い出すマスクのふかふか耳に北風
 ひたすらにコロナ避けたい早歩き鼻にふかふかマスクが弾む
 陽光に咲き乱れる花々は映像のみにコロナの花壇と
 光見え闇弱まりて晴れるやも薄暗き世のコロナの影は

マスクする顔の近づく理髪店恐れをがまん顔大接近
 COVID19をwithにするは負けているwithoutで緩むな日本

原発の黒い雲飛べ海の果てコロナは帰れ太陽の縁へ

近藤芳仙 霜月尽日

・信

錦木の末のひとひら陽にすけて霜月尽日一日を照らす

外気温マイナスとなる遠近のニュース流れて鳥帽子岳雪
 草原の草みな白く霜をおき朝の日差しに露をひからす
 心臓のペースメーカー検査して「あと九年ほど電池もちます」
 生きられる保障にあらぬ言葉なりされど電池に生かされてをり
 生かされて生きてある日を語りつつ友との道をかいま見てをり
 ガネテゆく媛街道の素朴さのひとりと馴染む午後のひととき

坂上直美

去年今年

天

紅葉は色褪せいよよ冬近し雲低く垂る雪も降らんか
 冬なれば暗きをおそれ部屋部屋の明かりを点けぬ独り住む家
 大人びて母に似給う敬宮叔母のティアラを輝かせつゝ
 冬晴れに雪を戴く遠き峰万里を翔る君恋う心
 君遣すセーター・ジャンパー借用しこの寒き冬を乗り切らんとす
 まためぐる君なき新春をいかにせん餅とお節は供えたれども
 玄関の色紙を虎に入れかえてささやかな新春の支度となせり

坂出裕子

どんぐり

洛

川べりの朝の散歩にまだ青きどんぐりの実を拾へり一つ
 世の中のすべてが遠くなりゆける思ひに籠るコロナ禍の日を
 駆け足で時が過ぎゆく心地するコロナで友に会へぬあひだに
 どこまでも白く真つ直ぐ伸びてゆく飛行機雲を羨み見つむ
 うつむきて草刈るときに世の中の全てを忘れ茫然と居る
 山際のほのか明るみ夕月のやがて昇らむ空のはなやぐ

さよふけに覚めて思へり遠き日のとりとめもなきひとつ思ひ出

佐藤道子 星

・甲

鈴木結志 南湖の景

・南

・福

ひとり逝き又友夜空の星となる卒寿祝ふはまさびしきもの
一人のみ賀状を交はす同級生若き日のこと想ふこの頃
何事も思はず遠くの温泉に夫喜べばさらりと行きし
日帰りの琵琶湖一周運転も苦にならざりし夫在る時は
夫と行きし温泉今は遙かに遠ふ宇宙と思へる程に
耳なりを大切にして暮す日々夫の気配の証となして
子に頼り子に頼られて過ごす日々孤りとなれば生きる術なし

篠原まり子 師走

・羊

関根栄子 水仙

・埼

シクラメンに劣らぬ赤きキャツツテールエノコロ草の風貌紛い
花の店子猫の赤き尾が並ぶエノコロ草の道が恋しい
肩先より飛びては戻り来ブーメラン帰巣本能持ちたる小鳥
暮れ早き灯らぬ部屋にうとうと卵くらいの温もり抱き
葉を落とす樹木清しも断捨離は今年も出来ず堂堂巡り
鬼灯の程よく乾く五つ六つ枝より切れば淋しき音す
涙腺の緩みし齡さながらに朝の「カムカム」涙の時間

柴田登志恵 無音

・天

関根和美

声

出逢いしはムラサキシジミよ奇跡とも成虫のまま冬を越す蝶
ぶつぶつと踏み行く团栗この秋は森の小径を駆け詰めており
黒雲の彼方に真赤き夕日あり希望をそこに保つがごとく
毎日にて何かせかさるる思いあり忘れいし手紙一通を出す
めぐり来る年思いつ厨辺に今年最後の水を流せり
恙無く迎えし元旦「冥途への一里塚」と詠みしは俳人
冬ざれの庭にも一株水仙の咲きおりひそかに香りを放つ

青空を飛天の領巾の刷きし雲ほとと動かぬ手術の長し
空の青矩形に切り取るサンルーム君が手術の終るを待ちぬ
うす紅はトルコブルーの空に溶け華やぎはなやき夕映えはじむ
突然死リスクの君が不整脈またも手術室ゆるがせしといふ
手術終へし君病院へ置きしまクリスマスイルミネーションの街へ下り来
言の葉の欠片ひとつを握りしめやうやく暗き家へ帰りぬ
紅茶葉のひらくつかの間まなうらに雪晴れの山の無音ひろがる
えのころの風になびいて誘える白き道あり何処へつづく

高尾恭子 聖夜

・大

たわむれの風にもつれて香りくる蠟梅ひゅうと朝の銀輪
 元氣かとぶっきらぼうな文字ふとく千歳経由の冬の寄せ書き
 捜しものはイブのチケットすりきれたダッフルコートのポケット冷えて
 シュトーレンを薄く切る夜を重ねつづ櫻の鈴音ちかづいてくる
 オルガンの音色スローに響きあう膝下小僧をかかえて聖夜
 プレミアムシートのチケット空を舞う聖夜ふたりが風になるまで
 飴色の風呂ふき大根ふうふうと湯気によくやく今年を仕舞う

高津砂千子

未完

・風

白黒のコントラストに目を瞠る雪に明けゆく家の屋根
 白ばらのもよの傘をさしてゆく雪降るあさの心はずみに
 迷いしが五年日記を購いぬ未元に終わるもまた良しとせん
 五年ぶり今年こそはと決めていし障子貼り替う晦日をこもり
 貼り替えし障子六枚びんと張りわたくしの部屋生き返りたり
 町角の白すがやかな傍助がまなこうるおす肩の荷おりて
 かむりいしベールいつしかこりおち隠すものなきうつし身となる

滝田靖子 雀

・新

その腹を満たす為にあと何粒の米が必要のか答へよ雀

人の手に撒かれし米を啄める雀よそれは幸運なんだよ

年末の炊き出しに列をなす人に差し伸べる手をこの國は持たない
 自らを助ける術のない者に気まぐれな幸運なんかないのだ
 自らの身を切る選択などなくて雇用保険料の値上げの決まる
 差し伸べてくれる手は施しとは違ふ雀よ腹が膨れるまで食べなさい

人の撒く米にその腹を膨れさせ雀したたかに冬を生き抜く

竹下妙子

風花

・霧

銀杏城と言はれし城の銀杏樹は城を包みて耀ひるたり
 散りやまぬ楓もみぢの危ふさは樓くれなるの文にあらずや
 はらはらと空より風花舞ひくるは雲のあなたは春にあるらむ
 終りまで見ればさびしき一本の蠟燭なれど焰なりしも
 枯れ落葉 足悪き吾を突風に爪先立ちて追ひ越しゆけり
 ずつしりと重たき荷物戴きて痛みし足は如何になすべき
 パンジーを植ゑる土の冷たきに中空網の雲流れゆく

田土成彦

五十円

・宙

うつすらと夜霧が包む街灯にまぼろしめきて人の過ぎゆく
 つねは十四今日は五十円朝寒の鳥居をくぐり賽銭箱へ
 行く人も帰りの人も玉砂利の音寒空にきしませて過ぐ
 つつみ道落暉に向かひ歩み行く数へ八十路に入れる新春
 敬神といふほどならね散歩道時に産土に寄ること多く
 正月に孫ら集ひきて冷蔵庫の出来たる隙間は安堵置く
 玄関を出る夢を見て目が覚めぬどこに出で行くつもりだつたか

田土才恵 海霧

・宙

草花に心を寄せて養いし老いの身なれど病いに克てす
 託されし花のいくつか冬越えて共に生きたしその思い抱き

愛しげに花を手渡すときの顔いつものよう初七日の来て
 きりきりと心の蝶をまきながら呆けずに生きし翠さんあり
 耐えて来しきみの苦しみ今解かれ師走の空に羽ばたき行かな
 ふるさとへ還りたまえと祈りいる西へ西へと風吹く夜は

海霧のゆるく流れる瀬戸の海いつか紛れて行くや御蓋は

玉井綾子 SDGs

・羊

クラス写真陰キャ、陽キャと友と指す子よ明日腐るみかんもありて
学校でSDGsを学びつつ女の逆は男だと言う
リカちゃんはお着替えされて梳がされて脱がされ揃がれ幼少期を去る
おんぶして子の手引くママの言うパパは勉強してて迎えに来れぬと
両親に両手取られてYの字となりし子の行く角のユニクロ
音のなき住宅街に矢印が児童遊園を指して傾く
植え込みに引っかかるてる赤白の布地にサンタの明日を夢想す

虎谷信子 越年

・伴

背戸畠に ばらの挿木の蘿芭は、いくつか並みて 年くれむとす
南天の老い目立ちきぬ ひさびさに落葉を掃けば、根の枯るるあり
年送る紅白歌合戦 かこちつつ、箸紙する墨 しつらへぬ
回廊を吹きぬくる風 呼ゆるなり。麿をわたるは 鳩のつがひか
寒餅も味噌仕込みごとも せず過ぎて 背戸蔵ひろし。立春となる
白壁の剥れをついばみる鳥の とび立ち椿の花群に入る
絹の衣は肌にそひきて ほのかなり。新年祝きて 和服を久びさ

小林能子

寅の土鈴

・羊

愛らしき虎の土鈴をしようざいなく振ればこところごと鳴る

へなへなと尻をつくさま見られしや土鈴のトラのまん丸の目に

富士を背にふるとの町駆けぬける箱根駅伝選手の夢にあやかる

駅伝復路最終走者を拍手して励ますひとり亡き母に似る

懐かしき人ら駆け去り日の暮れて旅のをはりの遊行寺の坂

会津より送られて来し身不知柿 日差しほど良きベランダに吊る
たわわなるマユミの朱に積もる雪会津に優しき思ひ出とどむ

久我田鶴子 トーハキッズ

・羊

身も世もなく嘆き哭する見せられて目より垂れるひとすちの冷え
「トーハキッズ」も知らずありにしわが日々を教へ子その身ぶかく削れる
みづから不憮生を言ひ療養中のこころの先なる「トーハキッズ」
行き場なき子らの集まる歌舞伎町「トーハキッズ」と今を呼ばれて
行き場なき子らに寄り添ふ人あれば食ひものにせむとうごめくもまた
寄り添へる人の負へるはいかばかり急性肝炎身に炎上中
児童福祉の最前線にはたらくを誇りとなしてなほ前を向く

●地中海叢書◇新刊・近刊案内

菊地栄子歌集『賛道』

(第42篇)

南北社

西提啓子歌集『あるがまま／スマイル』

(第943篇)

青磁社

近藤芳仙歌集『茅花』

(第945篇)

砂子屋書房

色井静代歌集『風吹くままに』

(第944篇)

いりの舎

御代田澄江歌集『花の遁走曲』

(第946篇)

九曜書林

*歌集についてのお問い合わせは直接著者にお願いします。

〔近刊予定〕

八橋千代子歌集『横浜』

(第947篇)

九曜書林

伏見富美恵歌集『フウの木』

(第948篇)